

原著論文

1939年全国皆スキー行進について
- 開催経緯と内容を中心に -
About National Skiing March 1939
- Focusing on the history and contents -

新井 博

Hiroshi ARAI

日本福祉大学 スポーツ科学部

Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi Univeristy

Abstract The Japanese government drafted a sports policy for war after the war broke out between Japan and China in 1937. The Japan Ski Association has been running ski parades throughout Japan since 1939. The purpose of this study is to clarify the process and content of the 1939 ski parade.

The results are as follows: The Japan Ski Association organized a ski parade nationwide on February 26, 1939, and planned to train the body and spirit of the people in preparation for the war. The Japan Ski Association has ordered all branches in Japan to conduct a ski parade. On February 25, ski parades were held in Sakhalin, Hokkaido, Aomori, Akita, Nagano, Toyama, Fukui, Noki, Kyoto, Okayama, and Miyagi. The main venue in Japan was Kirigamine Ski Area in Nagano, and the opening ceremony started at 10:00. The spirit was inspired by the ceremony, and physical strength was developed at the ski parade after the closing ceremony.

Keywords : Ski, Ski Parade, The Ski Association of Japan, Nagano, Showa

1. はじめに

1925年に誕生したスキー界の統括組織である全日本スキー連盟（以下、スキー連盟）は、1926年に国際スキー連盟（FIS）に加盟すると、世界のトップグループへの仲間入りを目指して競技力の向上に尽力するようになる。とりわけ1932年以降、スキー連盟はオリンピック大会での優勝計画を立て奮闘を始めている¹⁾。更に、皇紀2600年を迎える記念として1940年に日本でオリンピックを開催する動きが始まり、1937年に夏季オリンピック・東京大会と冬季オリンピック・札幌大会の開催が国際オリ

ピック委員会（IOC）で決定し、競技力を向上させる運動は年々過熱していく。

ところが、1937年7月に日本軍と中国軍との間で盧溝橋事件が起きると、スポーツ界の様相は一転する。同年11月に政府の体育運動審議会からの要請を受けて、スポーツ界は「銃後の備えとして国民の体力養成と精神作興」を目標にして、各スポーツ組織が尽力を始める²⁾。さらに、1年後日中戦争が泥沼化すると、政府はそれまで準備を進めてきたオリンピック大会開催の準備をやめて、7月にIOCに返上してしまう。

以後、オリンピック開催といった大きな目標を失ったスポーツ界は、日中戦争を意識した銃後の備えに力を注ぐことになる。スキー界では従来の競技力の向上策から、明確に国民の体力養成と精神作興のために、大衆スキー推進の方向に舵をきった。1939年から「国民精神総動員全国皆スキー行進」（以下スキー行進）を全国的な運動として展開するようになったのである。

スキー行進は、太平洋戦争に突入しても実施され、中央会場と全国の会場をラジオ放送で繋ぎ、中央での式典の進行に合わせて全国で一斉に挙行されている。当日は、全国で式典閉会後に、スキー行進が実施されている。

現在までに、小川勝次が『日本スキー発達史』³⁾のなかで「皆スキー行進日」として、1939年2月の第1回スキー行進を取り上げ、中央会場となった霧ヶ峰スキー場での式典の様子が簡単に紹介しているだけである。全国の会場で実施されたスキー行進の様子について触れた研究は、他に存在しておらず、スキー連盟による全国的な新たな取り組みとは、如何なるものか全体像が掴めない状況である。

そこで本論では、スキー連盟が日中戦争下で実施した1939年2月26日の全国皆スキー行進を取り上げ、開催に至る経緯と中央会場と地方会場での活動を解明し、スキー連盟による銃後の体力養成と精神作興の活動が、如何なる特徴を持っていたのか明らかにする。中央会場での様子と地方での様子を合わせて解明することで、まだ競技力向上を目指す全日本スキー選手権大会や学生選手権大会は開催されていたが、日中戦争に突入した状況下において、スキー界で新たに実施された銃後の備えの特徴解明のきっかけになると考える。

スキー行進に使用する資料は、東京大学新聞研究所の新聞資料や国会図書館の戦時下資料を用いる。

2. 日中戦時下での国民体位の向上

1937年7月に盧溝橋事件が起きると、翌年には戦線が徐州、武漢三鎮、広東へと拡大し、戦況は泥沼化の様相を呈するようになった。さらに、1938年4月に「国家総動員法」が公布されると、木材・

鉄・軽金属・皮・ゴムなどの必需物資が国の統制下におかれ、日本は国家総力戦体制下に入ったのである。

同時期、ヨーロッパではイギリス・フランスがドイツに宣戦布告し、また中国北部のモノハンで日本軍とロシア軍が衝突した。1938年7月15日に、日本政府は戦線の広がりや激化から、1940年に予定していたオリンピックの開催を不可能と判断し、IOCに返上してしている⁴⁾。

1938年9月5日に厚生省は「体力章」を制定すると、1939年10月1日から「体力章検定」を実施し、15歳から25歳の男子に走・跳・投・運搬・懸垂を課し、初・中・上級を判定するようになった。さらに、1940年4月に政府は「国民体力法」を公布して、兵力と労働力の合理的陶冶を目指したのである。

3. 1938年オリンピック開催返上後の運動の刷新

3.1 競技団体に求められた運動の刷新

1938年7月オリンピック開催を返上した翌8月、スポーツ界を傘下に置く大日本体育協会の下村宏会長は「国民体位の向上と精神作興に資する新しい指導方針を確立することは、オリンピック返上後のスポーツ界にとって焦眉の急を要する⁵⁾」と述べ、具体的方策の立案をスポーツ界に対して求めた。各スポーツ団体は、下村の指示に従って独自の方針を立案している。

例えば、柔道連盟においては、藍谷宗男が「国民体位の向上と精神作興」に資する新しい指導方針について、「国家的要求に対応興隆策を確立の好機」題して、指導者育成を重視した柔道界の抱負を公表している⁶⁾。

また、剣道連盟では佐藤卯吉が「実証さるるマ剣道価値 指導方針と対策について」と題して具体的な方針を公表している⁷⁾。

3.2 スキー連盟による新方針の公表

スキー連盟では従来積極的に取り組んできた競技力向上策から新たに方向転換を図り、機関紙である『スキー年鑑』を通じて会員に周知徹底を呼び掛け

ている。早速、同年12月に刊行した『スキー年鑑』の巻頭言⁸⁾で、以下のように紹介している。

「国民精神作興の上から云っても待望の札幌オリンピックではあったが、そして又、漸くして獲得した冬季オリンピックではあったが、遂に返上してしまった。・・・略・・・日章旗のたくさん掲げられるオリンピックの開催を熱望している。・・・

略・・・然し戦争はこれからだ。これからという言葉の中に銃後国民の体力問題が過半を占めていることに気づく。我々は当然スキーによる体位向上を計る責任を持っている。」

スキー連盟はオリンピックを返上したが「戦争はこれからだ」と明言し、銃後の体力育成に力を注いで行くことを高らかに宣言している。更に、連盟の方針を機関紙である『スキー年鑑』（年末刊行）を通して、約70,000人とも言われる会員に周知徹底を図っている。政府により国民精神運動が、「歩け・泳げ」をモットーにして全国的に進められたが、連盟は雪上で「滑れ」をモットーに、同年12月に「銃後の体力育成と精神作興」を目指して大衆スキーの振興を掲げた。そして、「全国スキー講習会の開催」「一般スキー術要項の発刊」「国民皆スキー日の催」を具体的な運動目標として示している⁹⁾。

3.3 国民精神総動員「歩け・泳げ」と「泳げ」

3.3.1 国民精神総動員「歩け・泳げ」

1937年日中戦争下、同年9月第一次近衛内閣下で厚生省の外郭団体として誕生した国民精神総動員中央連盟^{注1)}は、銃後の体力育成と精神作興を目指して、厚生省が提唱した「歩け・泳げ」をモットーに全国的な運動を展開し始めた。特に、1938年7月のオリンピック開催返上後、中央連盟は各スポーツ団体と協力して運動に取り組み始めたのである。

3.3.2 「泳げ」

日本水上競技連盟は、政府の「泳げ」に呼応してスポーツ競技団体に先駆けて、1938年8月28日ラジオの全国中継による「第1回国民皆泳全国学童水

泳大会」を開催している。

同第1回大会は、水泳連盟が軸となり、厚生省、文部省、国民精神総動員中央連盟、日本放送協会がそれを後援して、中央会場と全国の地方会場をラジオ放送で結んで式を挙行し、式後に水泳大会を各道府県のプール、河川、海で開催したのである。水連は、大会開催によって水泳報国をアピールしたのである¹⁰⁾。

一、開会（午前9時半）明治神宮外苑水泳場から開始ラッパを電波で各地へ

二、宮城遙拝

三、国旗掲揚及君ヶ代斉唱

四、皇軍将氏士ノ武運長久黙禱

五、末弘連盟会長挨拶

六、荒木文相挨拶

七、有馬大将の訓示

八、尋常科男子・同女子（名古屋）、高等科男子・同女子（甲子園プール或いは真田山小学校）で500メートル（10人一組、1人50m泳ぎ、全国一、府県一を選ぶ）（大阪の特定会場は、真田山小、愛目小、田辺小、池田小、茨木中、富田林中、住之江公園プール）他、講師ノ浜、境大浜など83の海岸、淀川、神崎川の各河川で25 - 50mのコースを臨時に設置。

七、愛国行進曲合唱

八、万歳奉唱

九、閉会（午前11時半）

上記の式における一、開会から七、有馬大将の訓示の後で、八、において500メートル（10人一組、1人50m泳ぎ、全国一、府県一を選ぶ）ことや（大阪の特定会場、他、講師ノ浜、境大浜など83の海岸、淀川、神崎川の各河川で25 - 50mのコースを臨時に設置）など実泳をしていることが分かる。

3.3.3 都下での体育大行進（歩け）

1938年11月3日に、大日本体育協会は明治節に際して国民精神作興体育大会として体育大行進（歩け）を東京で実施している。都下のスポーツ約30

団体、学生スポーツマンを中心に、約5千人が総動員されている。参加者は朝8時半に日比谷公園に集まり、二重橋を遙拝して解散した。参加者は激しく降りしきる雨の中、銃後のスポーツマンの意気を大いに高揚させたのである¹¹⁾。

スキー連盟からも顧問・会長をはじめ役員、大学生スキー選手を合わせて100余名が、都下での体育大行進に参加している。

3.3.4 スキー連盟は「滑れ」!

1938年12月、スキー連盟は独自に約70,000人の会員に、機関誌『スキー年鑑』(12月刊行)を通じて雪上で「滑れ」の運動を力説した。スキー連盟は厚生省が掲げた「歩け・泳げ」に呼応して、以下のように冬季に雪上で元気よく滑り、体力育成と精神作興を強く呼びかけたのである。

「歩け、泳げ」とある。これは夏の話。今や歩け、「滑れ」でなければならぬ。歩けというてもマ、冬季間をつうじて歩けない地方があり、ただ「すべれ」とのみ叫ばなければならぬ雪国が那土の半ばに達するだろう。「歩け、滑れ」と双方の出来る地方の国民と、ただすべれの民とか、私のこの稿の対象であり、つまり全国民によびかけたい¹²⁾。

3.4 国民皆スキー日の公表

スキー連盟は「滑れ」を力説した後、すぐに翌年の1939年2月から実施する「国民皆スキーの日」の実施について、具体的な計画を以下のように公表していた。

「昭和14年2月下旬の一日を国民皆スキー日に指定し、朝鮮をはじめ樺太に及ぶ全国の積雪地一斉に、国民精神総動員の趣旨に副う様な式を行ふ。そして一定の時刻に、一定の場所に集合し、其處で壮重な儀式を行ふ。ラジオ並びに拡声機の備付ある場所では中央からの講演を聴き、改めて時局を認識し、日本精神の高揚とスキー精神の発揮を誓ふ。従って今から拡声器と国旗掲揚柱の備付をお願いします。尚この催しは関係各庁と協力する必要があるので、その

日時については何れ適当な方法をとる積もりである。」⁹⁾

上記によれば、スキー連盟は全国で皆スキーの日を設定して、国民精神総動員の趣旨に副う様な式を行い、時局を認識して、日本精神の高揚とスキー精神の発揮を誓ふとしている。まさに、国民精神総動員の趣旨を重んじた「精神作興」を強く目指していることが窺える。

また開催の方法については、中央会場から朝鮮や樺太に及ぶ全国の積雪地に向けてラジオで内容を伝え、日本精神の高揚とスキー精神の発揮を誓ふと決定していた。また、準備物についても、拡声器と国旗掲揚柱の備付まで決めていたことが分かる。

3.5 「国民精神総動員全国皆スキー行進日要項」

スキー連盟は前年『スキー年鑑』の12月刊行に際して公表した「皆スキー日」から、「皆スキー行進」に計画を変えて、具体的な実施内容を記した「国民精神総動員全国皆スキー行進日要項」¹³⁾(以下)を作成した。2月10日以降(以下、各県新聞を参照)、各県の2月14日付の新聞でスキー行進の紹介を始めていることから、連盟本部から1939年2月上旬に全国の行政や地方組織に送付されていたことが分かる。

国民精神総動員全国皆スキー行進日要項
趣旨 全国に於ケルスキー実施者ヲ総動員シテスキー行進ニヨル耐寒雪上訓練ヲ行ヒ銃後国民ノ心身ヲ鍛錬シ、国民精神作興ニ資シ兼テスキーノ健全ナル普及発達ヲ図ラントス。
主催 全日本スキー連盟
後援 厚生省、文部省、国民精神総動員中央連盟、日本放送協会
期日 昭和十四年二月二十五日(日曜日)
場所 中央会場 長野県上諏訪町郊外霧ヶ峰スキー場
地方会場 全国スキー場、積雪地、学校寺社等他
実施要項
一、実施計画ノ主体・・・地方ノ実施計画ハ、都道府県代表加盟団体又ハ之ニ替ルベキ団体が主体

トナリテ計画立案ニ当ルモノトス。

二、実行主体・・・実施八道府県加盟団体ノ計画ニ基キ道府県下ニ於ケル各加盟団体、学校、倶楽部関係、及付属諸団体ガ主体トナリコレヲ行フ。

実施方法

- 一、計画及実施八各加盟団体ニ於テ夫々土地ノ状況、天候、地勢、参加者ノ姓年齢、技術ノ程度等其他ノ条件ヲ十分考慮シテ適宜ニ之ヲ定ムモノトス。例ヘバ行路ノ選定、行程ノ遠近、組合セ等八地方加盟倶楽部ニ全然マ裁定ヲ一任ス。
- 二、中央広場ニ於ケル実況八之ヲラジオニヨリ全国ニ放送シ、中央会場ニ於ケル式次第ニ從ヒ全国各会場一斉ニ行フモノトス。式次第八別紙式第要項ニヨリテ挙行ス。
- 三、各会場ニ於テ八時間ヲ厳守シ、午前十時開式ナルニツキソレヨリ十分前ニ式場ニ到着シ得ルヨウ行進ヲ計画シ、五分前ニ八整列完了ヲナスコト。
- 四、天候等ニヨリ行路ノ変更、参加者ノ限定等モ地方ノ現状ニ応ジ任意トナシ、遭難防止等ニ八予メ充分ノ注意ヲナスコト。
- 五、散会后ノ行路、解散方法等八各実施団体ニ一任ス、式場ニ八ラジオ設備及国旗掲揚設備ヲ要スル為予メ之ガ設備ヲナスコト。

式次第

- 一、開会（午前十時）
- 二、国旗掲揚及君ヶ代斉唱
- 三、宮城遙拝
- 四、戦没将士ノ慰霊並ニ皇軍将氏士ノ武運長久默禱
- 五、全日本スキー連盟会長挨拶
- 六、厚生大臣挨拶
- 七、愛国行進曲合唱
- 八、万歳奉唱
- 九、閉会
- 十、各団体毎スキー行進ニヨリ雪上訓練ヲ開始ス（中央会場ヨリ四十分間ラジオ放送ニヨリ全国一斉ニ施行ス）

上記の要項から、水連の「泳げ」の式に概略が類

似しており、参考にしていたと考えられる。また、後援に水連と同様に「国民精神総動員中央連盟」が加わっており、国旗掲揚・宮城遙拝・神社参拝・勤労奉仕などが、式で行われたことが理解される。精神作興の意図が、式次第の内容に強く表れていると言えよう。

3.6 1939年度決算にみる厚生省からの援助

スキー連盟は、1938年度予算まで文部省から援助を受けていたが、1939年より厚生省から400.00円の援助を受けるようになっている。そのため、同省の体力局が実施する体力養成と精神作興を積極的に担ったことは、容易に理解される。

スキー連盟の1938年度予算には、国民皆スキー行進日の費用が盛り込まれておらず、1938年度の段階では計画していなかった。しかし、1939年度決算の「支出の部」には256.90円の「国民皆スキー行進日費」が記され、国民皆スキー行進日費として256.90円が使われていたことが分かる¹⁴⁾。256.90円といった額は、他の予算に比べ額が大きく、スキー連盟にとって大掛かりなイベントであったことが分かる。

4. 1939年2月全国皆スキー行進の実施

4.1 既に実施を予定していたスキー連盟

前年8月、体育協会の下村会長が新計画の立案を各スポーツ団体に求めて以降、スキー連盟は秋頃までには概略を決め、スキー連盟傘下の全倶楽部や組織に開催の打診を行い、実施の意向を持つ地域を把握していたのである。そして、1938年12月末刊行の『スキー年鑑』に、翌2月にスキー行進の実施を予定している道府県のスキー連盟とそこでの開催地を、以下のように紹介していたのである¹⁵⁾。

以下で、表1内の樺太、青森、秋田、富山での様子について紹介する。また、実際は表1に記されていないが、北海道、福井県、岩手県のスキー連盟は、1939年2月26日にスキー行進を実施している（以下、3.3.2で北海道、3.3.5で福井について紹介）。12月末の『スキー年鑑』刊行までに、連盟に返答出来なかったためである。

表1 全国のスキー行進実施予定地域

スキー連盟	地方開催予定地域
樺太	豊原, 落合, 知取, 敷香, 大泊, 泊居, 真岡, 本斗
青森県	野辺地, 野内, 金木, 弘前, 青森, 碓ヶ関
宮城県	鳴子
秋田県	秋田, 小坂, 大館, 尾去澤, 高巢能代, 神宮寺, 和田, 大曲, 角館, 後三年, 横手, 大森, 湯澤, 本荘, 矢島, 院内, 他中学校
富山県	上瀧公園, 宇奈月, 立野ヶ原, 高岡市
栃木県	女峰, 男体山, 湯元 (第1, 第2, 第3), 那須
京都府	愛国山
岡山県	野原

勿論、本部となった長野県では、中央会場以外に野沢温泉などでも実施されていた。

4.2 中央会場霧ヶ峰スキー場での様子

4.2.1 当日までの中央会場の様子

1939年2月11日、長野県スキー連盟は第1回スキー行進の中央会場に、霧ヶ峰スキー場が選ばれた知らせを行進本部委員会から受けると、受諾したことを県内の役員に電報で連絡している。また2月17日に同連盟は県内の学校や団体から代表を招いて、行進の開催について臨時会議を開き、当日までの予定を決めている。2月20日に同連盟の小野常務委員と諏訪町役場の小松助役が、東京の行進本部委員会に受諾の挨拶に伺った。その後、厚生省に向き、栗本体育官から万端の指示を受けている。同日、最後に東京府スキー連盟の小林氏に会い、同連盟からの行進に対する希望を受けている。

2人は、2月21日に霧ヶ峰スキー場を管轄する上諏訪町役場に帰ると、東京の本部で受けた指示を担当部署に伝えている。さらに、諏訪町も行進の開催準備に加わることとなり、係の担当者を決めている¹⁶⁾。

4.2.2 当日の中央会場の様子

当日の26日スキー行進は、中央会場の霧ヶ峰スキー場と全国の開催会場をラジオ放送で結び、「国民精神総動員全国皆スキー行進日要項」の式次第に従って実施されている。午前10時から開会、順に

国旗掲揚及君ヶ代斉唱、宮城遙拝、戦没将士ノ慰霊並ニ皇軍將士ノ武運長久黙禱、全日本スキー連盟会長挨拶、厚生大臣挨拶、愛国行進曲合唱、万歳奉唱、閉会、続いて団体毎にスキー行進による雪上訓練を開始していた。以下では、開催されたところの様子を紹介する。

4.3 地方会場での様子

4.3.1 樺太スキー連盟の場合

樺太スキー連盟には、知取、大泊、泊居、真岡の各スキー倶楽部、また豊原、大泊、真岡の各中学校、さらに豊原、大泊、真岡、泊居の各高等女学校が加盟し、全国で4番目に多い3200名の会員を擁していた¹⁷⁾。

樺太スキー連盟では、すでに前年から連盟に加盟する豊原、知取、大泊、泊居、真岡、本斗、敷香、落合の8団体でスキー行進の実施を計画し、年末には表1のように機関誌で公表していた。

また、開催当日6日前の18日に全島に向けて『樺太日日新聞』により、「老いも若きも動員皆スキー行進日」の見出しで、26日長野県霧ヶ峰スキー場を中央会場にして、スキー行進が全国一斉に実施されることが伝えられている¹⁸⁾。

知取では、2月26日開催当日の予定が、同新聞に次のように紹介されている。2月26日知取町の体育協会が中心となり、スキー行進を実施する。午前10時、参加者は知取小学校に集合し、宮城遙拝、国歌を斉唱し、その後スキー行軍を行う。参加者は、三つの班に分かれて行進を実施する。第一班は、火防線初音町を経て炭磯に至るコースで実施。第二班は、火防線初音町を経て曙に至るコースで実施する。第三班は、火防線初音町を経て神社山に至るコースで実施する。当日は、青年団、各学校、愛好者、一般市民など参加者は、1000名に及ぶと予想されるというものである¹⁹⁾。当日も予告通り実施されたと考えられる。

上記3.5の実施要項（「・・・地方ノ実施計画八、都道府県代表加盟団体」）に従い、樺太スキー連盟（豊原）が中心になり実施されていたと考えられるが、連盟に加盟した組織のない本斗、敷香、落合の

地域では、体育協会などの呼びかけで参加をしたと考えられる。

4.3.2 北海道スキー連盟の場合

北海道スキー連盟には、札幌、小樽、旭川、函館、名寄、後志、十勝、上川、宗谷、野付牛、根室、全空地、天藍国、三井砂川、三菱大夕張、三菱美唄のスキー倶楽部が加盟し、全国で3番目に多い4700人の会員が存在する組織であった²⁰⁾。北海道スキー連盟では、前年末までに本部に実施の返答が出来ていなかったが、道内で準備は進められて、当日に実施されている。

北海道では、最初のスキー行進の記事が2月14日付の『北海タイムス』に「老若男女を総動員スキー行進二十六日全国一斉に挙行」の見出しで掲載され、全国でスキー行進が総動員して行われることが全道に知らされている²¹⁾。

続き2月16日付の『北海タイムス』に、当日26日札幌でのスキー行進の予定が掲載され、北海道スキー連盟が中心となり道内で思い思いのスキー行進を実施することになっていた。

札幌では、26日同連盟がスキー行進に参加する人々を午前10時半に円山公園坂下グラウンドに集め、11時から式を開催し、閉会后11時30分からスキー行進を予定している。市内から半ノ澤小学校までの9キロコースが設定され、学生、小学生、市民併せて約2,000人がスキー行進を実施する予定であると紹介している²²⁾。

小樽では、26日小樽スキー倶楽部が主催して小樽市役所が後援して、10時50分に学校・官庁・学生などから約2,000人を小樽公園に動員する。11時から式が開催され国旗掲揚、国歌斉唱、宮城遥拝、皇軍将士の武運長久の黙禱が実施され、午後1時から第2会場の皇太子陛下御成記念地に向けて、中央会場と平行してスキー行進を実施する予定であるとされている²³⁾。

4.3.3 青森県スキー連盟の場合

青森県スキー連盟には、青森、弘前、大鰐、野辺地、青森林友、青森鉄道倶楽部、五所川原体育協会、

金木町体育協会、嘉瀬、平賀、津軽山形、野内、碓ヶ關、行岳の各スキー倶楽部、また弘前高等学校、弘前中学校、東奥義塾、青森師範学校、青森中学校、青森商業学校、野辺地中学校、木造中学校、五所川原農学校、柏木農学校、青森市立中学校、弘前商業学校、青森県女子師範学校、青森高等学校、五所川原高等学校、野辺地実家高等学校、弘前和洋裁縫女学校、青森私立高等女学校、堤橋高等女学校が加盟し、全国で1番多い10,250名の会員を擁する当時最大級のスキー連盟であった²⁴⁾。

青森県では、表1のように既に前年の段階で青森、弘前、野辺地、野内、金木、碓ヶ關の6地域で行進が予定されていた。

青森市では、当日市内の中央会場である千刈小学校に、午前7時半から約800名が集まり8時から開会式が挙行された。青森県スキー連盟代表吉岡龍太郎による開会の辞より始まり、君ヶ代斉唱、国旗掲揚、宮城遥拝、皇軍将兵武運長久、黙禱、9時に閉会すると、県下の7会場では午前9時に行軍の火ぶたが切られた。当日は7会場と『東奥日報』にあることから、1会場予定より増えたと考えられる。

参加者は各班に分かれて目的地に向かって出発している。中央会場から出発する県スキー連盟の行軍部隊の参加予定者は、既に2月25日前日までの参加申込者と当日参加の者併せて約1,000名を超えていた²⁵⁾。

スキー行進の参加者は3班に分かれた。1班は、耐久を目的としていた。2班は、鶴が坂行きの長距離を目的としていた。3班は、新城行きの短距離で実施している²⁶⁾。

4.3.4 秋田県スキー連盟の場合

秋田県スキー連盟には、小坂体育会、吉野鉦山倶楽部スキー部、横中スキー部、花岡鉦山運動協会スキー部、後三年体育協会スキー部、湯澤体協スキー部、秋田林友スキー部、三菱尾小去澤鉦山協和会スキー部、能代体育協会スキー部、秋田鉄道倶楽部スキー部が加盟し、他に大館、角館、鷹巣、秋田、矢島、大曲、横手、湯澤、院内の各スキー倶楽部、さらに秋田工業学校、鷹巣農林学校、横手中学、秋田

県師範，大館中学，秋田市商業，秋田中学，角館中学，本荘中学，角館高等女学校，横手高等女学校，秋田高等女学校，大館高等女学校，花輪高等女学校，大曲高等女学校，秋田市高等女学校，他9の小学校が加盟していた。全国で2番目に多い6,578名の会員を擁する大きなスキー連盟であった²⁷⁾。

秋田県では，表1のように既に前年の段階で秋田，小坂，大館，尾去澤，高巣能代，神宮寺，和田，大曲，角館，後三年，横手，大森，湯澤，本荘，矢島，院内，其の他中学校でスキー行進を予定していた。

秋田市では，当日秋田県スキー連盟が手形中学校を中央会場にして，午前11時から開会式を挙行了した。市内の男・女中等学校や各小学校五年生以上に，一般スキーヤーを加えた総勢約3,000名が参加している。

式に内務部長らが参加し，ラジオから中央会場での式典の様子が流され，秋田でも式では国旗掲揚，君ヶ代斉唱，宮城遙拝，戦没招聘の慰霊並びに皇軍将士の武運長久の黙禱，全日本スキー連盟会長並びに厚生大臣の挨拶，一同愛国行進曲を合唱，万歳三唱が行われた。閉会后，参加した団体は手形山踏破コースや手形練兵場一周等のコースを団体毎に選択し，雪の中で壮烈なスキー行進を繰り広げ，それぞれ解散している²⁸⁾。

4.3.5 富山県スキー連盟の場合

富山県スキー連盟には，富山県中等学校体育連盟，富山高等学校スキー部，呉羽紡績会社福野工場・井波工場スキー部，南越スキー団，富山新人スキー協会，他に頭川，宇奈月，富山スキー倶楽部，富山アマチュア，富山県電，牛嶽，八ヶ山，立野ヶ原，三峰，黒東，山崎，高岡の各スキー倶楽部が加盟し，全国で8番目に多い1,600名の会員を擁していた²⁹⁾。

富山県では，図1のように既に前年の段階で富山市の上滝公園，宇奈月，立野ヶ原，高岡市の4地域でスキー行進を予定していた。

当日は，東部・北部・西部の3箇所で開催されている。北部は富山市の上滝公園スキー場で行われ，矢野知事が行進隊長として参加している。東部は宇奈月スキー場で行われ，坂田学務部長が行進隊長と

して参加している。西部は立野ヶ原スキーで行われ，大島警察部長が行進隊長として参加している。各スキー団体，学校，その他の団体など約1,000人が，時々粉雪の舞う天候の中を行進している³⁰⁾。

4.3.6 福井県スキー連盟の場合

福井県スキー協会には大野，阪谷，富田，勝山，武生，福井アマチュア，敦賀，敦鉄，杉山，服部，前谷ヶ原，大田原，三十三間山，妙薬の各スキー倶楽部，他福井高工と体育協会のスキー部が加盟し，600名の会員を擁していた³¹⁾。

最初のスキー行進の記事は，2月14日付の福井新聞に「全国皆スキー行進」の見出しで，2月26日に全国で一斉に実施されること，福井県スキー連盟の主催で2月26日9時からラジオによる中央会場と結んだ開会式が行なわれることが紹介されている³²⁾。開会式については，一，開会 二，国旗掲揚 君ヶ代斉唱 三，宮城遙拝 四，戦没招聘の慰霊並びに皇軍将士の武運長久の黙禱 五，全日本スキー連盟会長の挨拶 六，厚生大臣の挨拶 七，愛国行進曲を合唱 八，万歳三唱で閉会となることを伝えている。

続く2月22日付の福井新聞で，福井県並びに県スキー協会は，2月26日の全国皆スキー運動を前に，県下の中学校・小学校及びスキー倶楽部に対し，スキー行進に参加を促す通牒を出していることを紹介している。続いて，県スキー協会が山岳スキーを決行する予定を紹介している。10時から県内の南部・南西部・東部の3カ所で山岳スキーを決行の予定。

南部では，開会式後10時に十条小学校（現在，十村駅付近）に集合し，若狭にある三十三山（842㍍）への登山を実施する。

南西部では，北陸道の最も険しい敦賀新保宿から今庄二つ屋宿の間を木ノ芽古道と呼ぶ区間で木ノ芽峠の縦走が実施されている。10時に大桐駅前に集合し，松村指導員をリーダーとして，木ノ芽峠を従走する。

東部では，法恩寺山（1357㍍）への登山。勝山米伊駅前午前8時に集合し，木村，伊藤両指導員を

リーダーとして登山を行う。参加者へ注意事項として、昼食は二食分用意すること救急薬品材料を携帯のことで、指導員の指揮に絶対服従のことが盛り込まれている³³⁾。

5. まとめ

(1) 開催の経緯は、1938年当時の時局（体力養成・精神作興）に応え、「歩け・泳げ」に対して、滑れをモットーに全国的なスキー行進を計画し、1939年2月に「要項」を全国に配信し、厚生・文部省・国民精神総動員中央連盟・日本放送協会の後援を得て実施している。

(2) スキー連盟が地方の加盟組織に呼びかけ、中央と地方会場をラジオで結び、式で精神作興を図り、続くスキー行進で寒さに打ち勝つ精神・体力育成のために、設定されたコースでスキー行進を実施している。

(3) スキー連盟は日中戦争下において新たに銃後の備えとして、中央と地方を結んで雪上でのスキー行進を全国的に実施したのである。

注

- 1) 国民精神総動員中央連盟は、昭和12年日中戦争下で政府の外郭団体として誕生し、会長有馬良橘の下で古参の軍人・官僚が幹部となり、興亜奉公日を設けるなど、戦時体制構築と社会不満の一扫に努めていた。

文献

- 1) 新井博 (2013) 1940年幻の札幌冬季オリンピックに向けてのスキー振興 - 1928-32年全日本スキー連盟の活動を中心に - . スキー研究, 10 : 35-45.
- 2) 入江克己 (1986) 日本ファシズム下の体育思想. 不味堂 : 東京, p.145.
- 3) 小川勝次 (1956) 全日本スキー発達史. 朋文堂 : 東京, pp.257-258.
- 4) 宮木昌常 (1938) オリンピックを返上するまで. アサヒ・スポーツ, 8 : 17-18.
- 5) 下村宏 (1938) オリンピック返上後のわが運動競技会時局認識と覚悟. アサヒ・スポーツ, 8 : 14.
- 6) 藍谷宗男 (1938) 国家的要求に対応興隆策を確立の好機. アサヒ・スポーツ, 8 : 28.
- 7) 佐藤卯吉 (1938) 実証さるるマ剣道価値 指導方針と対策について. アサヒ・スポーツ, 8 : 29-30.
- 8) (1938) 巻頭言. スキー年鑑, 12 : 1.
- 9) (1938) すべれ. スキー年鑑, 12 : 122-123.
- 10) 大阪朝日新聞 (1938) "国民皆泳だ" 頑張れ. 8月13日.
- 11) (1938) 体育大行進, スキー年鑑, 12 : 26.
- 12) 小島三郎 (1938) "国民皆滑" を提唱. アサヒ・スポーツ, 12 : 18.
- 13) 国民精神総動員全国皆スキー行進日要項.
- 14) (1939) 昭和十四年度決算 (自昭和十三年四月一日至昭和十四年三月三十一日). スキー年鑑, 13 : 248.
- 15) (1939) 第1回「全国皆スキー行進」実施地. スキー年鑑, 14 : 39.
- 16) 上田貢 (1939) 全国皆スキーの記. スキー年鑑, 13 : 25-29.
- 17) 樺太スキー連盟 (1939) スキー年鑑, 13 : 354-355.
- 18) 樺太日日新聞 (1939) 老いも若きも動員皆スキー行進日. 2月18日.
- 19) 樺太日日新聞 (1939) 老いも若きもスキー行進. 2月26日.
- 20) 北海道スキー連盟 (1939) スキー年鑑, 13 : 355-356.
- 21) 北海タイムス (1939) 老若男女を総動員スキー行進二十六日全国一斉に挙行. 2月14日.
- 22) 北海タイムス (1939) 札幌の大衆二千が銀界縦走の健康譜 国民皆スキー行進日の壮挙. 2月16日.
- 23) 北海タイムス (1939) 皆スキー行進小樽市の行事. 2月20日.
- 24) 青森スキー連盟 (1939) スキー年鑑, 13 : 356-357.
- 25) 東奥日報 (1939) けふ皆スキー行軍小河知事が総指揮官. 2月26日.
- 26) 東奥日報 (1939) 困難と闘ふ体験の国民皆スキー行軍. 2月27日.
- 27) 秋田スキー連盟 (1939) スキー年鑑, 13 : 361-363.
- 28) 秋田魁新報 (1939) 手形の壮観, 国民皆スキー行進. 2月27日.
- 29) 富山スキー連盟 (1939) スキー年鑑, 13 : 359-360.
- 30) 聖鏡奉載スキー (1988) 白い太刀嶺. 富山スキー連盟 : 富山, p.7.
- 31) 福井県スキー連盟 (1939) スキー年鑑, 13 : 369.
- 32) 福井新聞 (1939) 全国皆一斉にスキー行進, 来る二十六日を期に. 2月14日.
- 33) 福井新聞 (1939) スキー行進参加. 2月22日.